

「古代米は作ってる浦部さんてのはこちらかいね」

2000年が明けて間もない頃、年配の男が現れた。新潟県西部の山村から来たという。手にはビニール袋に、片手でひとすくいほどの大豆。

「面白い豆だすけ、作っ



第4部・有機とともに

てみねかね。うちの方じゃ手間がかかるさけ作らんぐなつたんで」。浦部修(61)、真弓(61)夫妻宅には、こうした穀物持参の突然の訪問がよくある。「地元じゃ、さといらずさせて(と言つて)」。男は豆の説明をひとしきりして帰った。

## 大豆が抑草

猛々しく繁る葉、太い茎、地面に接するように成る実。夫妻は成長した大豆の威容に驚き、食べて驚いた。「確かに『砂糖要らず』だ」

古代米、大麦と並んで浦部農園の経営の柱となる大豆。抑草効果があると聞いた。導入当初は効果的だった紙マルチ(被覆材)も、土地が肥えてくると分解が早く進み長持ちしなくなつた。強い苗をつくる「ポット育苗」でようやく失敗が少なくなり、「あと一歩」のタイミングで舞い込んだのが、さといらずだった。

「土地柄や気候などの環境で農法は異なる。大豆はわれわれの土地に合っているということ」。修はそう考え、04年から大豆を本格的に作付け。コメ(夏・秋)、麦(冬・春)、大豆(夏・秋)の順で生産する農園の「2年3作方式」が固まった。

# 試行錯誤で農法確立

との出会いだった。

さといらずは農園に期待以上の恵みをもたらす。

さといらずを作付けした圃場。翌年、コメを作るため水を張ったところ、中央部分が盛り上がりつつあるのが分かり、平に均した。田植え後、土を削った辺りだけ雑草が伸び始めた。

## たった2圃場

浦部農園も試行錯誤の連続だった。EM(有用微生物)ボカシは効果が判然とせず、米ぬかは風に飛ばさ

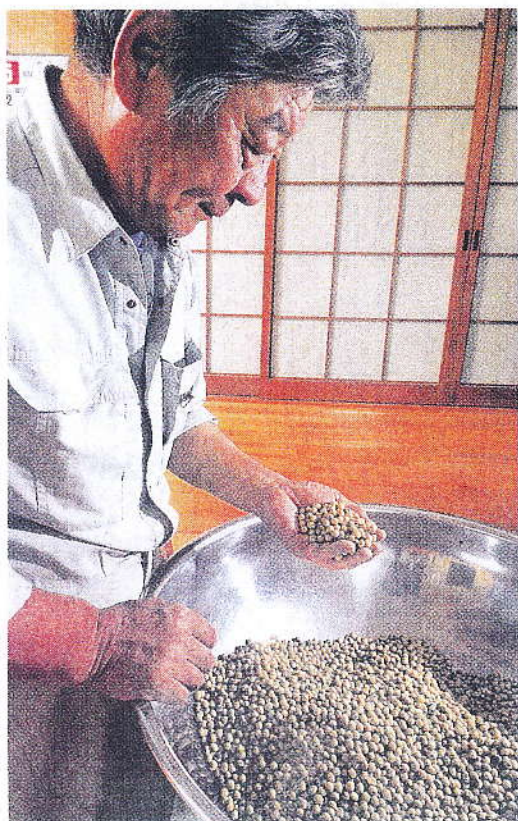
## 2年3作

れた。導入当初は効果的だった紙マルチ(被覆材)も、土地が肥えてくると分解が早く進み長持ちしなくなつた。強い苗をつくる「ポット育苗」でようやく失敗が少なくなり、「あと一歩」のタイミングで舞い込んだのが、さといらずだった。

「土地柄や気候などの環境で農法は異なる。大豆はわれわれの土地に合っているということ」。修はそう考え、04年から大豆を本格的に作付け。コメ(夏・秋)、麦(冬・春)、大豆(夏・秋)の順で生産する農園の「2年3作方式」が固まった。

昨年、コメを作付けした農園の圃場は110枚。手取りで除草したのは1、2枚だけだった。

「土地に合わせた農法を見つける。それが有機の難しさと言えは、そうかもしれない。ただ、農薬と機械が普及する昭和30年代以前は、みんながやっていた」と修。こつとも言う。「水はけがよく、冬場に乾燥する土地は転輪作がしやすい。群馬は、有機に向いている」



(敬称略)

浦部農園の経営の柱となった大豆「さといらず」。輪作したり、商品にならないくず大豆を田にまいて雑草の生育を抑える